編集後記

プロ野球キャンプ真っ盛りの2月にこの編集後記を書いています。例年の沖縄は雨が多く、選手、チームを気の毒に思う年もあるのですが、今年は暖冬かつ雨が少ないおかげで順調に練習できているようです。その練習を見学応援するファンも多く、所によっては渋滞を引き起こしているようです。

表紙はブーゲンビリアとシーサーです。昨今愛嬌のあるシーサーをお土産店でよく見かけますが、このシーサーは本来の魔よけらしく怖い顔をしています。

本号の記事を見ていますと（本号だけではないのですが）実に様々な事案、問題点があることがわかります。医療費、IT化、無過失補償制度、病診連携、生活習慣対策、救急医療を含む地域医療、高齢者医療、などがあります。

なかで最も印象に残ったのは昨年に開催された「医学会総会」の特別講演の熊本地域医療センター小児科部長後藤善隆先生の小児救急医療の報告で、うまくいっているとされる『熊本方式』でさえ崩壊の危機にある、患児の親の対応で数人の看護師、事務職員が退職、演者自身も体調不良になった話が報告されました。現代の医療の問題点について考えさせられる内容で、このような話こそ一般県民（国民）に知ってもらいたいと思いました。

月間行事では、琉大第一内科藤田次郎先生により「世界結核デー（3月24日）」、はなしろ小児科花城可雅先生により「子ども予防接種週間（3月1～7日）」のお知らせが詳細に解説されています。

生涯教育では県立中部病院泌尿器科宮内孝治先生により「泌尿器科領域の癌について」、プライマリー・ケアでは県立南部医療センター・こども医療センター小児科島袋智志先生により「熱性痙攣への対処」についてわかりやすく解説されています。

発言席では国立病院機構沖縄病院石川清司先生により「がん対策情報センターとがん診療連携拠点病院の機能と役割」についての記事があり本県の進む方向が示唆されています。

地区医師会コーナーでは浦添市医師会久田友一郎先生により同市の減量運動の記事「浦添市3kg減量運動の新世紀へ向けて」があります。県内では旧佐敷町の運動が有名と思いますがこの運動が成功し県全体に広がることを願っています。

若手コーナーでは、みなみしまクリニック島袋毅先生により「妖精と狼男と糖尿病警察」と題してご寄稿いただきました。その中で、『糖尿病バーンアウト』という本が紹介されています。最近回診で糖尿病教育を受けた患者さんが難しいと言っていたのを思い出しました。ぜひ読んでみたいと思います。

リレー随筆は県立宮古病院の米田恵寿先生による旧上野村の博愛の話で、昨年まで7年間宮古島に勤務した私としては感慨深く拝読しました。

最後の随筆「祇園精舎と沙羅双樹」は長嶺信夫先生によるインド旅行記ですが、いつもながら歴史のロマンを感じさせる先生の文、奥様との仲の良さ、に感銘しました。

本号も自信を持ってお送りできる内容と思います。投稿頂いた先生方に深く感謝申し上げます。

広報委員　上田　真